

一人の無名作家

芥川龍之介

青空文庫

七八年前ぜんのことです。加賀かがでしたか能登のとでしたか、なんでも北国とうじんの方の同人雑誌でした。今では、その雑誌の名も覚えて居ませんが、平家物語へいけものがたりに主題を取つて書いた小説の載のつてゐるのを見たことがあります。その作者は、おそらく青年だつたらうと思ひます。

その小説は、三回に分れて居りました。

一は、平家物語の作者が、大原御幸おほはらごかうのところへ行つて、少しも筆が進まなくなつて、困り果てて居るところで、そのうち、突然、インスピレーションを感じて、——いらか豊破きりふだんれては霧不斷かうの香を焚たき、とぼそ枢落しやうちゆうちては月常つきじやうちゆう住ともしびの灯を挑かかぐ——と、云ふところを書

くところが、書いてありました。

それから二は、平家物語の註ちゅうしやくしや釈しやく者しやのことで、この註釈者

が、今引用した——蕞いらか破れては……のところへ来て、その語句の

出しゆつしよ所しよなどを調べたり考へたりするけれども、どうしても解わから

ないので、俺おれなどはまだ学問が足りないのだ、平家物語を註釈す

る程に学問が出来て居ないのだと言つて、慨がい歎たんして筆を擱おくと

ころが書いてありました。

三は現代で、中学校の国語の先生が、生徒に大原御幸おはらごかうの講義を

してゐるところで、先生が、この——霧きりくだん不断たんだんの香かうを焚たき……と云

ふやうな語句は、昔からその出所も意味も解らないものとされて

居ると云ふと、席の隅の方に居た生徒が「そこが天才の偉いところ

ろだ」と、ひとりごと 独言のやうにつぶや呟くところが書いてありました。

今はその青年の名も覚えて居りませんが、その作品が非常によかつたので、今でもそのテエマは覚えてゐるのですが、その青年の事は、折々今でも思ひ出します。才をいだ抱いて、埋うづもれてゆく人は、外ほかにも沢たくさん山ある事と思ひます。

（大正十五年三月）

青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第四卷」筑摩書房

1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行

1979（昭和54）年4月10日初版第11刷発行

入力：土屋隆

校正：松永正敏

2007年6月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

一人の無名作家

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>